

# 特定分野の功績



三浦 榮一

114



馬塚 丈司

116

## 海の貢献賞

- 海の安全確保、環境保護、汚染防止等に尽くされた功績
- 海に関わる産業分野において
  - 傑出した技能による同分野への貢献と技能の伝承に尽くされた功績
  - 優れた発明・考案・改良等により同分野の発展に尽くされた功績

# 三浦 榮一



青森県

青森県五戸町を流れる五戸川の不法投棄などで悪化した水質、環境の改善に取り組もうと、平成5年に自治会の有志らと清掃や草刈りを始めた。その後平成10年に「五戸川をきれいにする会」、平成18年に「五戸川流域の保全と創造を考える会」、平成20年に「魚にやさしい五戸川の環境づくりを進める会」を設立して会長を務める。それぞれ自治会や学校、地域住民や他団体と協力して同川の環境保全に努め、次世代に継承してゆく取り組みや、多様な生物の生息が可能な自然環境を取戻す、生態系保全活動を続けている。

◇推薦者：五戸町 町長 三浦 正名

平成5年夏「ふるさとの川が悪化している」と、出稼ぎの若者達から指摘されました。そこで「川をきれいにしよう」と、五戸川沿いの川原町自治会有志が平成7年、各自治会代表を集め、堤防の清掃や土手の草刈りを呼びかけました。

それ以降、清掃活動を通して、地域の奉仕及び環境美化に関する意識向上を図るため、町民にチラシで働きかけ、多くの方々から賛同を得て、6自治会、小学校並びに高校の8団体構成で、会員数約500人の「五戸川をきれいにする会」を平成10年11月設立、風雨にもめげず、河川環境の美化に取り組んでいます。

多くの人々が奉仕活動に参加することによって河川への不法投棄が減少し、流域全体にふるさとの川を守る機運が芽生えています。

学校関係者からは、川の水質や生物調査を行うことにより、川に親しむ機会が増え、自然を大切に作る心と故郷への愛着心を持つようになり、とても良い教育の場となっていると喜ばれています。

平成18年3月、五戸川流域が県条例に基づく保全地域に指定。流域3市町村（八戸市、五戸町、新郷村）で河川愛護に関わる36団体および保全地域の巡視活動をしている、『ふるさと環境守人』二人の賛同を得て、同年6月「五戸川流域の保全と創造を考える会」（略称五戸川を考える会）を設立。各団体間の情報交換や環境保全活動を積極的に展開、活動の広域化を図っています。

更に五戸川流域を対象に多様な生物の生息が可能な自然環境を復活させるため、7団体構成の「魚にやさしい五戸川の環境づくりを進める会」を平成20年4月に設立。川に生息する魚類が海と川を往復出来る河川環境や五戸川の生態系保全に向けた活動の支援等を行っています。そして、稚魚の放流が2町村の幼稚園児や保育園児の手によって行われ幼少時から自然の大切さを学んでいます。

平成22年からは、五戸川の6つの頭首工に魚道工事が(6億円)実施されています。



▲ 稚魚放流の説明をする北県議員



▲ 小学生の水質と生物調査



▲ 稚魚放流



▲ 五戸川の草刈り



▲ 五戸川の土手に吉野桜を植える



▲ カヌーの体験会



▲ 五戸高校生の五戸川清掃

# 馬塚 丈司



静岡県

1984年から静岡県浜松市の河口周辺環境の保全活動を始め、翌年ボランティア団体を創設した。絶滅危惧種の保護調査活動、海岸環境回復活動、ポイ捨てゴミの削減活動、子どもたちへの感動教育、講演会などを行ってきた。地道な活動により「野鳥の森」の建設の実現や「絶滅危惧種アカウミガメとその産卵地」の市文化財指定化の実現など自治体を動かした。特に先駆的なアカウミガメの保護活動では国を動かすなど、ウミガメ等希少生物保護の礎となった。海岸ゴミ問題を解決するため提唱した「ウエルカメクリーン作戦」は1990年から現在も続き毎年8,000人以上が参加する市民行事となっている。2000年にはNPO法人サンクチュアリエヌピーオーを設立し、市民や企業、行政と協働するなど、29年にわたり活動している。

◇推薦者：田辺 久世

この度は、荣誉ある社会貢献者表彰・海の貢献賞にお選び頂き心より感謝申し上げます。

また、27年の長きに亘り支えて下さった皆様にも感謝申し上げます。

私の海岸・河川の環境保護活動のきっかけは、1979年、日本最大規模のツバメのねぐらや多くの野鳥の生息地でもある浜松市の二級河川馬込川の河口に整備計画が持ち上がったことからです。この河口の豊かな自然環境を守り、野生生物が安心して暮らせる場所を守ろうと、1985年に「サンクチュアリジャパン」を設立し活動を開始しました。翌年、河口近隣の浜松海岸で絶滅危惧種アカウミガメの産卵を新聞で知り、調査の必要性を呼びかけました。当時、市民や行政の関心は低かったため、1987年から当会のボランティアと共に産卵の実態調査を開始し、115キロの遠州灘全域が産卵地であることを確認しました。その後10年間、「絶滅危惧種アカウミガメとその産卵地」の市指定文化財化とオフロード車の海岸走行の禁止を浜松市に働きかけ、実現しました。この活動は国を動かし、水産庁はアカウミガメの保護事業を1992年に「重要水生生物保護事業」と指定し、ウミガメ等希少野生生物保護の礎となりました。1999年には、10年間の取り組みが実を結び海岸法が改正されました。広域産卵調査を始めて20年目の2012年には、平均産卵数の2.7倍の産卵が確認され保護活動の成果が現れ始めました。2014年度からは、盗掘などからアカウミガメを守るため指定希少野生動植物に指定（捕獲等が罰則を伴う）する準備が進んでいます。

また、海岸ゴミ問題を解決するため提唱した「ウエルカメクリーン作戦」は、1990年に始まり毎年8千人以上の市民や企業・行政が参加する浜松市の恒例行事となりました。2000年には、NPO法人「サンクチュアリエヌピーオー」を設立し、NPOと市民・企業・行政と協働して行う活動方法を定着させました。同年、中田島砂丘入り口にネイチャーセンターを開設し、次世代を担う心豊かな子どもたちを育てることに力を入れ、今日では年間1万人もの人が活動に参加しています。

しかし、一方で海岸にはまだまだ多くの環境問題が山積し、海岸への人工構築物の設置、海岸の浸食・礫化、紫外線を発する人工光の削減、卵の盗掘、オフロード車の海岸走行、ゴミの散乱などへの、更なる対策を講じる必要に迫られています。

この海の貢献賞受賞は、地道な活動を社会に周知させ今後より一層これらの問題解決を目指して励むように後押しして頂いたものと、気を引き締め直して海岸環境改善のための活動を市民と共に進めていきたいと思っております。

特定非営利活動法人 サンクチュアリエヌピーオー  
理事長 馬塚 丈司



▲ネイチャーセンター



▲アカウミガメの涙



▶産卵後砂かけするカメ



▲海ガメの上陸跡解説



▲子ガメを見送る家族



▲野外での説明風景

# 東日本大震災における救難活動

- 東日本大震災に際し、復旧・復興に尽くされた方、また尽くされている方
- 東日本大震災に際し、身命の危険を冒して救助、救難などに尽くされた方（当該の活動により亡くなられた方を含みます）
- 東日本大震災に際し、身命の危険を冒して二次的な災害や事故などを未然に防いだ方（当該の活動により亡くなられた方を含みます）



宮城県亶理地区  
オストメイト支援チーム

120



NPO 法人  
ゆめ風基金

132



一般社団法人  
震災復興支援協会  
つながり

122



成富 真介

134



浅見 健一

124



みんなでがんばろう  
逗子プロジェクト

136



田村 満

126



特定非営利活動法人  
Youth for 3.11

138



青木 孝文

128



被災地における高齢者への  
肺炎球菌ワクチン緊急接種  
プログラムワーキングチーム

140



高橋 芳喜

130



高松市消防職員協議会  
中井 聡

142

## 宮城県亘理地区オストメイト支援チーム



大網 さおり

宮城県

宮城県亘理地区で、震災直後から避難所で困窮していると思われるオストメイト（人工肛門・人口膀胱保有者）のサポートを、皮膚・排泄ケア認定看護師と地域の保健師、行政担当者がチームを組んで行った。支援が必要と思われるオストメイトを各避難所からリストアップしてもらい、人数や避難先の情報を亘理役場保健福祉課で集約し、そこから随時情報提供を受け、巡回して、避難時に自分の装具を持ち出せなかったり、避難所で装具の交換場所がない、トイレを占有してしまう等、排泄時の問題を抱えたオストメイト一人一人に対応した。ストーマ（人口肛門）について知る人が少なく理解されにくいことから、集団生活が困難で大きなストレスを抱えるオストメイトの支えとなった。

◇推薦者：宮城社会保険病院 病院長 石井 元康

はじめに「オストメイト」とは、大腸等の病気により腹部に腸を露出させ、新たな排泄経路を形成する人工肛門（ストーマ）造設術をうけたストーマ保有者の事であり、排泄物を受けるために専用の装具が必要な方である。

2011年3月11日東日本大震災発生。当院（宮城社会保険病院）は仙台市太白区にあり、海岸線より直進で約5Kmに位置している。診療圏は仙台市太白区・若林区・名取市・亘理町等海岸線を含んでおり、津波により装具を持ち出せない困窮したオストメイトが多くいると考え、亘理町役場保健福祉課と協働して『亘理地区オストメイト支援チーム』を立ち上げ、避難所にいるオストメイトに対して巡回診療を行った。

具体的には避難所のオストメイトを保健師がリストアップし、保健福祉課で情報を集約。随時情報提供を貰いながら、担当者が巡回した。担当者である皮膚・排泄ケア認定看護師（以下 WOCN）は、各避難所でのオストメイト人数・名前を確認し1人1人に対し装具保有数、現在のストーマトラブルの有無、体調、精神的不安の有無、避難所で困っている事、装具交換時の占有場所の有無を確認。ケア主体者不在の場合は装具無料提供の情報、代用装具の使い方や注意点を記したメモを残した。各避難所に在中している保健師に対しては相談窓口として WOCN の連絡先を配布した。

避難所という限られた空間の中で、交換時の占有場所がなくプライバシーが保たれない状況で、精神的不安が限界なオストメイトもいた。そのため占有場所の確保交渉を行う等、面談は1人2時間に及ぶ事もあった。10日間に及ぶ避難所巡回で13名に対応し、その内容の一部は朝日新聞に掲載された。DMAT や自衛隊等による巡回診療は行われていたが、オストメイトのみを対象とした巡回診療はなく、避難

所に配置されていたスタッフは殆ど『ストーマ』を見た事がないため、オストメイトの精神的不安や津波による装具紛失等で困窮した状況への支援は皆無であった。WOCN が巡回診療をした事で、オストメイトは「わかってくれる人がいる」と感じ、避難所での集団生活を送ることができ、さらに現場の保健師や看護師への支援もできたのではないかと思います。

現在、震災の経験を元に多くの人に『ストーマ』『オストメイト』を知ってもらうため、地域の介護担当者を対象としたストーマケア研修会を開催している。今回このように荣誉ある賞をいただいた事は、光栄な事であり今後もオストメイトのため啓蒙活動を行いながら、オストメイトの尊厳を守れるよう努力していきたい。

宮城県亘理地区オストメイト支援チーム

大網 さおり



▲3人でチームを組んで支援を行った



チームの活動を伝える新聞記事

# 一般社団法人 震災復興支援協会 つながり



宮城県

東日本大震災発生後、宮城県南三陸に拠点を置いてボランティア活動、支援活動を行っています。代表の勝又三成さんは同県内で被災し、仙台市内に戻る際に被災状況に衝撃を受け、支援物資を届けたり、義援金の募金活動を行ったりしていた。その後、南三陸で海中の瓦礫撤去や行方不明者捜索、子どもたちのためにイベントを開催したほか、同町のわかめ工場の漁業支援や「地元の海で泳ぎたい」という子どもたちの願いに応えるため、約3000名以上のボランティアと共に長須賀海水浴場のビーチ清掃を行い、昨年7月「長須賀つながりビーチ子ども広場」をオープンさせた。

代表理事  
勝又 三成

◇推薦者：沼崎 司／神山 歩／阿部 正浩／TSUNAGARI 南三陸シーモンキー 学生リーダー 岩石／中山契約会 会長 阿部 倉善／宮城県漁業協働組合中山地区養殖組合 組合長 最知 隆／株式会社 ニュー泊崎荘 三浦 宮倫子／古田 博一／山本 晋吾

この度は社会貢献者表彰という素晴らしい賞を受賞出来た事を心より嬉しく思います。南三陸町を中心に毎日のボランティア活動も、いつまで続けるべきなのか不安との戦いでした。しかしこの様な名誉ある賞を頂きスタッフ一同、より一層社会貢献意識も高まり、今後更なる活動への決意のきっかけともなりました。

東日本大震災よりまもなく3年がたちますが、私共は全員が今も本気で毎日被災地支援活動を行っております。

海中や砂浜での行方不明者捜索や、漁業の邪魔をする海中瓦礫の撤去。震災孤児遺児を始め、被災地の子ども達と共に地元の海水浴場を復活させる為、南三陸歌津にある天然の砂浜『長須賀海水浴場』の砂浜に埋もれる瓦礫を撤去し、24年の夏に見事地元の子も達と沢山のボランティアの力で、オープンする事ができました。

子ども達も、自分達の力で海水浴場を取り戻せた事が誇りとなり、大きな自信につながりました。翌年も子ども達自らの力でオープンさせる事を夢見て、冬のうちから清掃活動が始まっています。

人口流出や漁師離れが多く見られる被災地で、少しでもこの活動が人口流出の歯止めになり、更に、砂浜清掃活動がボランティアにこられる方々と地元の住民との交流の場となり、観光客の誘致に繋がっていく事を目標とし活動しておりますが、これから進んでいく防潮堤計画で、子ども達を取り戻した海を無くしてしまう事への不甲斐なさを強く感じ、住民の本当の気持ちをしっかりと訴えていき、住民が望むべき素晴らしい景観の町づくりを行っていきます。

宮城県では未だ行方不明者は1,289名と沢山の方が見つかりません。震災から3年がたとうとしていますが、残された遺族の心の支えになれるよう、これからも潜水士チームは海中の捜索活動をつづけていきます。

最後に私共の活動に協力していただいた沢山の支援者と、団体を陰ながら支えてくれている沢山の仲間達に心より感謝いたします。  
ありがとうございます。

一般社団法人 震災復興支援協会 つながり  
代表理事 勝又三成



▲ フィンランドからサンタクロースを招き震災孤児遺児を訪問



▲ 遺品を見つけ遺族へ戻した時



▲ 震災直後の光景



▲ 海中捜索



▲ ワカメ、メカブの芯抜き作業



▲ 少しづつ綺麗になるがまだまだ人手が必要



▲ 地元漁師と海中の瓦礫撤去の様子



▲ 海水浴場オープンが決まった日



▲ 砂浜の瓦礫撤去ふるいかけ



▲ 地元住民との清掃活動



▲ 海水浴場砂浜清掃に集まるボランティアさんと現地の説明の風景



▲ 桂島再生プロジェクト



▲ 被災者への法要

## 浅見 健一



宮城県

震災発生時、館長として勤務していた宮城県仙台市の高砂市民センターに1,200人以上の住民が避難してきたが、同センターは市の指定避難所ではなかったため、行政からの支援は断られた。このことに浅見さんは奮い立ち、「以後行政からの支援は一切受けない」と啖呵を切ると、避難者に向けて「私の命にかえても皆さんをお守りします」と宣言し、近隣の企業や友人知人などに支援を求めた。すると、全国から予想を上回る支援が届き、同センターでは震災翌日から異例の一日3食の支給を可能にし、震災当日から2週間以上自宅に帰らず避難者を支え続けた。「行政に頼らない避難所」として広く報道された。同センター避難所が閉鎖されてからも支援活動は継続し、退職後は震災復興支援グループ「きぼう」を設立し仮設住宅及びみなし仮設住宅などへの支援活動を継続している。

◇推薦者：高橋 實

このたび、公益財団法人社会貢献支援財団による平成25年度の社会貢献者表彰式典におきまして受賞の栄に浴し、身に余る光栄に心より感激するとともに、改めて日下会長様をはじめ、選考にあたられました関係者の皆様へ感謝と御礼を申し上げます。

また、東日本大震災後、高砂市民センター避難所に対し、心温まるご支援を頂きました全国の多くの企業及び個人の皆様にも重ねて感謝いたします。

地震発生当日、私は仙台市宮城野区にある仙台市高砂市民センターの館長として勤務しており、地震が発生した直後から高砂市民センターには、津波から逃げてきた外国人15名を含む多くの避難者が押し寄せ、さらに、津波により全身が油まみれになった避難者が助けを求めてきました。

このような状況の中、私は区役所に対し、食料や毛布などの支援を要請しましたが、区役所の職員から市の指定避難所ではないので、すぐには支援できないと断られたために、「今後一切、行政の支援を受けない」と啖呵を切り、自ら行政を頼らず避難所運営を行なうことを決意し、高砂市民センターに避難してきた避難者に対し、すぐに支援を受けられない経過を説明し、今後は、自分の命に代えても避難した市民の命を守ることを約束しました。

しかし、長期に亘る避難所運営が予想される中、行政から支援を受けずに市民の命を守ることに、正直なところ大きな不安はありましたが、強い信念を持って即行動し、高砂市民センター避難所の厳しい現状を打破するために、避難所運営が軌道に乗るまでの二週間は、自宅に一度も帰らずに自分で食料や物資を集めるために奔走しました。近隣の企業や全国の知人・友人に支援を頼み、さらに全国の多くの企業や個人の皆様から食料や物資などの支援を受け、お蔭様で震災当日は勿論、仙台市の指定避難所が当初1日1食のときも高砂市民センターの避難所は毎日3食を提供することが出来ました。震災翌日から、食料に困った近隣の老人福祉施設や町内会にも食料などを支援

するため、毎日最低でも3,600食以上を集め、毛布についても避難者の協力を頂き、震災翌日までに2,000枚以上を集めました。さらに、集めた毛布の一部を石巻をはじめ多くの避難所に支援。その後、行政に頼らない避難所としてマスコミ報道され、毎日全国から予想を越える山ほどの食料や物資の支援を受け、福住町内会や広瀬川倶楽部及びアマニヤ・アフリカなど複数のNPO団体の力を借りて、宮城、岩手、福島などの避難所50ヶ所以上に再分配し、他の避難所を支援してきました。

高砂市民センターの避難所は、一時1,300人を越える避難者が避難し、避難者名簿届出者は、1,227名に達し、区役所との話し合いにより途中から食事のみの提供を受けることに同意しました。他の避難所への支援も継続、高砂市民センター避難所は、6月28日閉所されるまでの110日間、避難していた避難者に感謝されながら、行政を頼らない避難所の役目を終えることが出来ました。閉所後も他の避難所や仮設住宅及び津波被災地域の町内会などには、全国から集めた食料や生活物資の再配分支援を続けました。

平成24年3月に高砂市民センター館長退職後は、震災復興支援グループ「きぼう」を7名で立ち上げ、企業や個人の皆様から生活物資などの提供を受け、宮城・岩手・福島の仮設住宅や一部自治体への支援行なっております。



▲会議室での避難者の様子

▲地震直後の高砂市民センター事務所の被災状況  
事務所内の書棚が転倒し書類などが散乱した

▲前庭でカーテンや紅白幕などで身体を保温し様子を見守っている



▲2階の部屋に入れきれず廊下に座り込む避難者



▲階段から2階に移動中の避難者



▲若鳥の唐揚げ無料配布を待つ被災者



▲市民センター敷地内3メートルまで津波が来ました



▲避難所における普通救命講習



▲毎日定刻に開催されるリーダー会

▲救援物資をご支援頂いた方々の掲示と  
仙台市以外の避難所支援状況

## 田村 満

岩手県



陸前高田市で高田自動車学校を経営しており、震災の津波の惨状の中、高台にあった同校は被害を免れたことから、広大な敷地と宿泊施設、その他の建物は、救援センターや全国の中小企業家同友会約43,000社の会員から届けられた支援物資の集積センターの役割を果たした。商売柄、自動車や運転手（教官）、燃料が十分であったため、田村さんの指示で同校の全員と、八木澤商店をはじめとする地域企業経営者の仲間と協力し市内各地の避難所や、行政の手が回らない避難所や住民にも救援物資を届けて回った。教習所コースは各県や警察の野営地となり、合宿所は岩手警察の臨時宿泊に提供された。市内の様々な事業所にも教習室を仮事務所として提供した。今年になって市へ派遣された名古屋市派遣職員を合宿所にて受け入れている。併行して地元の企業家らと「なつかしい未来創造株式会社」を設立し、地域の資源を活かしながら、約500名の雇用を生み出す複数の事業の育成を進めている。

◇推薦者：森谷 潤

この度は、思いもかけない栄誉に預かりましたこと、深く感謝申し上げます。先の東日本大震災の津波の大災害で、陸前高田市や大船渡市が壊滅状態になってしまいました。その際に、我が社や中小企業家同友会の仲間達と共に、地域を、そして、住民の皆さんの生活を守るため、我々が出来ることは何でも引き受けて活動したことが認められ、この度の社会貢献表彰を受けることになりました。世の中から多大に評価されたことは大変なる喜びではありますが、しかしながら、我々の活動は、当然の活動に過ぎませんので、嬉しい反面、何となく恐縮しております。

去る11月24日（日）の帝国ホテルでの祝賀会から始まり、翌25日（月）の表彰式とランチパーティー。この様な晴れがましい舞台に、家内共々招待されたことは、一生に一度あるかないかの素晴らしい夢のような経験でした。それに、安倍総理夫人の昭恵さんまで祝福に駆けつけて下さりまして、記念写真まで一緒に撮らせて頂きました。昭恵さんは、ご主人が総理大臣になる前から、大船渡市や陸前高田市に何度か足を運んで頂いておりますし、拙宅にもお泊り



▲雇用調整助成金の申請方法を地元の企業に説明

頂いた間柄でして、親しくさせて頂いておりましたが、まさか、あのような晴れがましい御席でお会い出来るなんて、私達は、本当に運が良く恵まれているなあと思った次第です。

これからは、この素晴らしい賞に恥じないように、もっと精一杯の活動をして行かなければならないと、改めて深く深く思っております。まだまだ、発展途上の身ですので、これからの皆様方からのご指導を賜りますようお願い申し上げます、この度の御礼とさせていただきます。本当にありがとうございました。



◀教習コースを開放しての支援物資配布



▲自動車学校校舎へ支援物資搬入



▲地域のためにけせん朝市陸前高田を震災後いち早く開催



▲物資配布の指揮をとる田村氏



▲陸前高田のビジョン図を提起（当時）



▲自動車学校校内の支援物資



▲陸前高田の将来ビジョンを語る

## 青木 孝文



宮城県

震災の犠牲者の身元確認が難航する中、日本歯科医師会は警察庁からの要請を受け、歯科所見による身元確認のために被災地に多数の歯科医師を派遣し、8,750体以上のご遺体の歯科所見採取作業にあたった。これらの情報と、歯科医院等から取り寄せた膨大な生前歯科情報を照合する作業は困難を極めた。そこで、東北大学副学長を務める青木さんは、歯科情報照合システム「Dental Finder」の開発及び無償提供を行うとともに、情報技術を活用した迅速かつ効率的な身元確認ワークフローを確立し、歯科所見による犠牲者の特定に大きな成果をあげた。青木さん自身も長期にわたって宮城県警で照合作業に尽力した。

◇推薦者：公益社団法人 日本歯科医師会

このたびは、日本歯科医師会のご推薦により栄誉ある賞を賜り、心より御礼申し上げます。震災で犠牲になられた方の身元確認に際しては、多数の歯科医師の先生方が警察に協力しました。歯によるご遺体の個人識別を行うためでした。私自身は、情報工学の専門家として、この活動を支援いたしました。本来は、私のような一介の学者が賞をいただくのは、おこがましい限りですが、震災の記憶を風化させないために、特段のご配慮を下されたものと肝に銘じ、授賞式に臨みました。

取り組みの経緯を簡単にご紹介いたします。私は、これまで、画像認識の研究を専門として、自動車、情報家電、産業機器、ロボティクス、科学計測、医療などの分野で、多数の企業や研究機関と共同研究を行ってきました。この研究の中でとりわけ異色ではありますが、私自身、力を入れてきた分野に「法歯学的な遺体の個人識別」があります。私たちは2005年から、歯のエックス線画像の自動照合によって、災害等で亡くなられた方を特定する研究を行ってきました。群馬県検視警察医の小菅栄子先生との共同研究です。2009年には、新潟県歯科医師会とともに警察歯科医会全国大会を企画・開催し、2010年にはこの大会の議論を提言として取りまとめました。将来の大規模災害に備え、情報技術を活用して身元確認の迅速化を図るという提言です。

その直後、2011年に東日本大震災が発生し、故郷の石巻が被災した時には、とても偶然とは思えず、衝撃を受けました。このとき、宮城県において歯による身元確認の指揮をとられたのが宮城県歯科医師会の江澤庸博先生、宮城県警の伊東哲男機動鑑識隊長でした。私は、お二人の計らいで、情報工学の専門家として身元確認チームに参画しました。日本歯科医師会の柳川忠廣先生にも全面的なご支援をいただきました。

実際に私たちが現場で開発したのは、歯科所見をデータベース化して検索する技

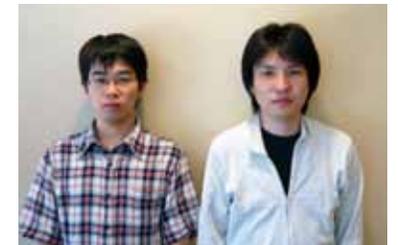
術です。江澤庸博先生・柏崎潤先生と相談しつつ、正味1～2週間程度の突貫工事で開発しました。健全な歯は「1」、部分修復歯は「2」など、歯の状態によって1から5までの数字を与え、32本の歯をデータ化して検索しました（宮澤富雄先生のモデルを基本にしました）。このソフトウェアをDental Finderと名付け、警察で運用しながら改良を重ねました。現在、全国に無償配布しております。最終的には、口腔内写真と歯科エックス線画像を加えてデータベース化し、歯科的個人識別のワークフローを構築しました。

身元確認のために、岩手・宮城・福島では、2011年の7月末までに延べ2,599人も歯科医師が活動しました。「歯科医術たるは愛の御業なり（Dentistry is a work of love.）」とは、内村鑑三の言葉ですが、まさにその通りであると思います。このような献身的な活動を支援するために、私たちは今後も全力でご支援申し上げる所存です。最後に、東日本大震災の身元確認の作業は、現在も継続されていることを申し添え、このたびの震災により被害を受けられた皆様に、心からお見舞い申し上げます。

東北大学 大学院情報科学研究科  
教授（副学長併任） 青木 孝文



▲宮城県の身元確認チーム（警察・歯科医師会・東北大学）



▲情報処理を支援した東北大学伊藤助教（右）と青山大学院生（左）



▲歯科医師による鑑定（宮城県歯科医師会の江澤身元確認班長ほか）



▲Dental Finderを用いた身元確認ワークフロー（作業の流れ）

▲身元確認のための歯科情報照合システム  
Dental Finder（CDで全国に配布）▲身元が不明なご遺体の一覧  
（2011年5月1日仙台市の安置所）

## 高橋 芳喜



宮城県

宮城県南三陸町歌津地区で被災し、家も流されたが、同地区は支援から取り残された地区であったことから、インターネットを通じ全国に現状を発信して支援者を集めた。また地元で活動していたNPOに依頼して学習塾を開校してもらい、そこで小学生から高校生の学習を支援した。NPOの学習塾が閉鎖された後は、漁師としての仕事も始まったが、リフォームした自宅を開放して塾をボランティアで続け、現在も続けている。

◇推薦者：三浦 秀斗

震災から、間もなく3年経とうとしています。

自宅、船、親戚、友人、余りに多くの物を飲み込んでいった津波に今でも怒り、悲しみはおさまりません。

3・11の夜に避難所で先輩漁師が語った『元に戻るまで何年かかるかわからないぞ…』という言葉がとてもリアルだったのを覚えています。

私が住んでいる南三陸町歌津の泊浜という地区は半島のような地形になっており、震災当時はライフラインが全てストップし、陸の孤島となっていました。

外部に連絡すら儘ならない状態で情報は錯綜し、住民の不安は募るばかりでした。『とにかく、何か動かなければ…』という焦りにも似た感情で、当時の状況を比較的に被害の少なかった地域に住む姉を経由して、全国に発信したのが私の最初の一歩だったと思います。

炊き出し、物資の受け入れ、ボランティアのマッチング、とにかくがむしゃらに動きました。

震災から3ヶ月経った頃にJapan 元気塾の加藤秀視氏の基で東北復興サポートセンター『Hamanasu』を立ち上げ、被災地の現場の声を吸い上げ支援の幅をより大きく拡大しました。

その中でも私が力を入れたのが中学生や高校生が無料で通える『Hamanasu 学習塾』です。

学業からは大学卒業から丸8年離れていた私に、子供たちに教えることなどできるのか？と不安もありましたが、それ以上に子供たちが子供らしく過ごせる空間が必要だという考えが強かったのだと思います。

本来ならまだ、子供と見られがちな中学生が震災を機に「大人」としてカウントされ、食べたいもの、遊び、スポーツなどを我慢させられていました。

仮設住宅は狭く、多感な時期を押し殺して暮らす中・高生に息抜きの場で気軽に立ち寄ることのできる場所は必要だと自分の経験から知っていました。

塾を始めた当初は、私も手探り状態でしたが、インターネットを通じ全国の方が知り、たくさんの支援の手を差し伸べていただきました。問題集など直接子供たちの成績につながるもの、速読教室やカメラを使ったワークショップなど子供たちが楽しんで参加できるものなど、様々な経験を積むことができました。

サポートセンターの活動拠点が封鎖した後も生徒たちの声を尊重し、自宅を開放し学習塾は続けています。これに関しては快く応援してくれた家族に感謝しています。

私も子供達もたくさんのことを経験させていただきましたが、私一人でできたものは何一つありません。考えは人それぞれでも『被災地の子供たちを応援したい』という想いは皆同じ方向を向いていました。私はその歯車の一つにすぎません。

一人の力は限られています。

100という数字があるとして100×1も1×100も同じなら、一人で100歩も100人で1歩も同じなんですよ。

だったら、きっと多くの人を巻き込んだら復興だって早く進むと思います。

私の考えは震災当時から何も変わっていません。子供たち、被災地のために私ができることは些細なことだろうけど、とにかく動こう！

最後に、これまで応援してくださった皆様、今回大変素晴らしい賞を授与して下さった社会貢献支援財団、推薦してくれた生徒に感謝の言葉を述べさせていただきたいと思います。私の小さな活動を取り上げていただき誠にありがとうございました。



▲ 仙台から来ていただいたボランティアの講師と授業風景



▲ 自宅に移す前の活動センター Hamanasu



▲ Hamanasu 学習塾の休み時間風景



▲ 学習塾 授業風景



▲ 授業風景

# NPO 法人 ゆめ風基金



大阪府

1995年の阪神淡路大震災を機に、自然災害で被災した障がい者を支援する目的で設立され、2001年に法人格を取得した。16年間様々な自然災害に置いて海外も含め被災地の障がい者・児に4千万円以上届けてきた。東日本大震災では2億円を拠出。いち早くノウハウを活かして全国に広がるゆめ風ネットワークと連携をとり被災地の障がい者の状況把握（513か所）を開始し、職員を派遣し支援体制を確立し被災した障がい者の生活拠点への資金支援を実施した。

代表理事  
牧口 一二

◇推薦者：公益財団法人 社会貢献支援財団

11月25日、帝国ホテルのレッドカーペットの上、「よかったねー」「おめでとう」「よく頑張った」「これからも応援してるよ」との声が聞こえます。51歳にしてはじめての、夢のような出来事です。

脳性まひによる、言語障害、四肢麻痺、全身筋緊張を持つ私。ゆめ風基金代表理事・牧口一二の代行で、授賞式に出席させていただきました。きっと、これからもこの日を思い出すたびに、私はうれしさと体が震え、心がきゅっと引き締まることでしょう。

ゆめ風基金は、阪神淡路大震災を機に、自然災害で被災した障害者を支援する目的で基金を設立。障害者は通常時でも、目いっぱい気力を奮い立たせ、極限の体力を振り絞り生きています。薄いベニヤ板の上で、細い綱を頼りに立っているようなものです。その命は、災害が降りかかろうものなら、とたんに危ぶまれます。私たちは、一つでも多くその命を守ることが、市民の防災体制づくりに貢献できるものと信じ、活動してきました。

この度の表彰は、私たちが信じ、声をあげ、沢山の方に応援を求め続けてきたことに、これからも胸を張りありがたうと言える誇りを、持たせていただけるものです。

また、個人的な出来事ですが、受賞者一分間自己紹介で、私の脳性まひ特有の声と話し方で、20年ぶりに友人に再会。式前日の夕食・懇談会では、互いの生き抜いてきた様子を語り、人としての在り方や、日本のNPOや福祉・医療の状況など、様々な分野の方々と交流を深めることができました。厳しい現状と向き合いながらも、懸命に活動されている皆様から貴重な学びを得ることができました。

私たち、ゆめ風基金も、歴史ある社会貢献支援財団のこの表彰に恥ずべくことないう、障害者福祉という名にとどまらず、縛られず、これからも活動を続けさせていただきます。

被災障害者の幸福は、すべての市民の幸福につながる。このことを信じて……。

NPO 法人ゆめ風基金

福本千夏



▲被災地報告会「3.11 東北関東大震災 そのとき障害者は」2011年11月23日。地震発生以後、関西でははじめて岩手、宮城、福島の被災地障害者支援活動を担うひとたちが一堂に会し、マスコミの報道がおよばない「ほんとうのこと」が被災地の障害者の肉声で届けられました。



▲発生直後、現地の障害者拠点を立ち上げるとともに、刻々変化する現地の要望にあわせた救援物資を届けました。



▲障害当事者ボランティアの活動。岩手県宮古市。障害者の行動支援。



▲「みちのく TRY」。震災で犠牲になられた人々への追悼と、これからの街の復興に障害者が参加し、バリアフリー化や防災計画、福祉サービスへの提言書を各地の行政に提出しながら、障害者が岩手県宮古から陸前高田までの150kmを歩きました。



▲障害当事者ボランティアの活動。岩手県沿岸部のバリアフリー仮設住宅2011年9月。バリアフリー仮設住宅とは呼ばれているものの、お風呂やトイレに段差があり、ドアも狭くて使用するには困難な状況でした。県庁で、写真を見せながらこの実態を説明し、「もっと障害当事者の声を聞いてください」と改善要望を求めました。

# 成富 真介



香川県

震災発生から3カ月後に南三陸町に入り、長期ボランティアを行ってきた。瓦礫撤去、支援物資の受け入れ配布など行っていたが、潜水士の資格を取得し、海中の瓦礫撤去や漁の障害物などの海中調査を行った。その後2012年5月から行方不明者の捜索に携った。さらに公立志津川病院裏の、海水で満たされた側溝（長さ40m 深さ2m）の捜索を呼びかけ、町役場職員や警察、ボランティアと合同捜索を行なった。その後も作業を続け約120本の遺骨を探しだし、宮城県警に届けている。

◇推薦者：株式会社 M.BROTHERS 代表取締役 宮脇 康敏

私のボランティア活動は、震災3か月後の6月から9人で約1週間の活動で終わる予定でした。しかし、福岡県から宮城県の南三陸町に入り、初めて見た町の光景と臭いは今でも忘れることはありません。自分に何か出来ることはないのかずっと考えていました。

一番の支援は現地で残って必要な支援を行うことだと考え、8人が帰った後も、私だけ被災地に残ることにしました。陸上、海中のがれき撤去を主に行いました。その中で、白黒の町の光景に少しでも色を付けようと全国から支援を募り、コスモスの花も咲かせたこともありました。被災地では初めてのテント生活や車中泊も経験しました。

町の復興にはまず、大量のがれきがなくなる事が必要と思い、約9か月南三陸町で活動しましたがボランティアができること、また自分ができる支援が少なくなってきたこともあり、被災地から離れようと思いました。しかし、震災から1年経ってもいまだ行方不明者が3千人ほどいることが頭から離れず、亡くなった方を海に潜って探すという支援が私にはできるのではないかと思うようになり、潜水の資格を取り、震災翌年の5月ごろから行方不明者の捜索活動を始めました。

活動は日曜日以外ほぼ毎日行いました。海の中は視界も悪く音が聞こえることもないので、恐怖しかありませんでした。震災から1年3か月たった時に、水中で老夫婦を見つけることができました。ご遺体を引き上げる際のご遺族の方の私たちに對する感謝の言葉、ご遺体と対面した後のほっとしたような笑顔を見たとき、今後とも捜索活動を続けたいと感じました。

捜索活動を中心に、その後1年ほど活動を続けました。数えきれないほど海に潜り、泥を掻き出しました。その中で、まだ子供が見つからないご遺族の方と一緒に捜索したこともありました。その方から震災から2年になろうとしているとき、最近やっと気持ちが落ち着いてきたと聞きました。私はその時に捜索活動を終わり

にしようと思いました。

今も被災地ではボランティアが活動しておりますが、現地で被災者を手助けするよりも、あの震災の悲劇をどこの場所でも繰り返さないように備えるほうが、今は大事なように感じております。

私が宮城県を離れる際、地元の方に「今度は遊びに来て」と言っていただきました。私が支援していたつもりでしたが、逆に私のほうが地元の方たちに支えられていたと初めて気づかされました。その方たちにも表彰式典に来ていただき、全国のボランティアで知り合った方たちにも来ていただきました。

賞をいただいたのは私一人の力ではないと改めて実感しました。

貴重な経験、また一生の財産になるような賞、私のようなものが頂戴できましたことに改めて感謝いたします。

2013年1月 成富 真介



▲ 遺体捜索を行った石巻の大川小学校の近くの長面浦



▲ 海中での潜水作業により引き上げたガレキの山



▲ 重機で側溝から泥を上げ遺骨を確認①



▲ 車の引揚作業（ご夫婦の遺体が車の中に）



▲ 重機で側溝から泥を上げ遺骨を確認②



▲ 大川小学校近くの側溝の捜索

# みんなでがんばろう逗子プロジェクト



代表  
桐ヶ谷 覚

神奈川県

神奈川県逗子市の市民団体で、震災直後には水や食料などの物資を陸前高田市竹駒町に運んだ。以来、同町に支援を続けている。特に、支援物資を届ける中、仮設住宅では女性が引きこもりがちになっているのに気づき、女性の働く場を作ろうと、約700万円の募金を集め、同町の材木店等の協力や逗子葉山建設組合の協力で2012年8月に「竹駒食堂」を完成させた。食堂は地元の食材を使い、朝昼営業している。今後は夜も営業して拡大しながら独居老人などの地域のコミュニティと成るようにしたいと考えている。逗子から陸前高田市まで片道600kmを往復しての支援活動を続けている。

◇推薦者：公益財団法人 社会貢献支援財団

このたびの「平成25年度 社会貢献者表彰」の栄に浴し、改めて感謝申し上げます。私たち神奈川県逗子市の仲間、震災直後から陸前高田市に一点集中で被災地支援を続けてきました。

なぜ陸前高田だったのかというのは、理由は二つです。

- ①人口比当りの被災者が飛びぬけて甚大であった
- ②たまたま友人が隣町に住んでいて、支援活動の情報が入りやすかった

こんな状況から、あちこちと支援の輪を広げることより、一ヶ所の深掘りで支援をする方が極め細やかな対応ができると判断し、実行してきました。

それまでの活動を簡単にまとめてみます。

- ・避難所への炊き出し
- ・仮設住宅への炊き出し
- ・仮設住宅へ下駄箱、押入れの中棚の設置、洋服掛けの取り付け、ベンチの設置（900台）バーベキューの開催等の支援活動
- ・働く場の提供のための「竹駒食堂」建設
- ・家庭用生ゴミの製作委託により雇用の創出

下駄箱や中棚の取付けなども、実際に訪問した時に仮設に住まわれている人たちの不便を聞いて、少しでも仮設の暮らし不便が解消されればと施工しましたし、ベンチも隣近所の方々が立ち話しか出来ない状況を見て、もし座って話しが出来れば少しでもコミュニティが成り立つのではと思ったからでした。

震災の7月にバーベキューで元気付けをと企画しましたが、ほとんどの人は震災後初めてビールを飲んだというくらい、暮らしには制約を受けていたのです。

大勢の人が亡くなって、とてもお酒を口にする気持ちにもなれなかったことなのでしょう。

何度も訪問している間に、支援の対象がどんどん変化していきます。

当初はまずは食べることで、それから住まいの手当てとなりますが、その後は人間はやはり生きるには仕事が必要であり、世の中に貢献できることが生きがいにつながるのです。

そのためには働く場を確保することが大事になると感じました。

そこで多くの方々のご支援を頂いて、結果的には食堂が完成しました。

今は他所から陸前高田に働きに来ている人たちの朝食の提供や、昼食の提供を主な仕事になっていますが、それまで食堂の経験のないスタッフの人たちもチームワークよく頑張ってくれています。

本当の被災地の復興には程遠く、相当に長期化になることは明白です。

私たちも「忘れない!! つないでいく!!」を合言葉に、変化する現地の状況に合わせてこれからも支援活動を続けていかななくてはならないと思います。

このたび表彰式に参加して初めて、世の中には無償の愛で奉仕活動をしている方がこんなにも大勢おられるのかと知らされ、驚きました。

20年も30年も黙々と継続されて活動をされているのには、本当に頭が下がります。

財団に対してこのような活動をされている方々に灯りを灯していただけることに本当に感謝申し上げます。



▲上棟際



▲桐ヶ谷覚代表（中央）



▲七夕かざり炊出し 2003



▼竹駒食堂 Opening



◀竹駒食堂のスタッフの皆さん



▲竹駒食堂メニューとんかつ定食（別名：復活定食）

# 特定非営利活動法人 Youth for 3.11



代表  
河合 信哉

東京都

震災当日に4人の大学生によって設立され、時間はあるが資金と経験の無い学生をボランティアに派遣する為、現地で活動する団体と学生の間に入り、交通と宿泊とボランティアがパッケージとなったプログラムを提供し、学生の力を効率的に活かせるシステムを作った。これまでに18団体と提携し、被災3県13ヵ所へ延べ13,336名を派遣し、瓦礫撤去や仮設住宅でのコミュニティ支援などを行い、報告会の実施や漫画やSNSを用いたボランティア経験の蓄積を社会へ発信し、震災を負の経験で終わらせない活動を行っている。東北での活動のノウハウを活かし、将来起こりうる災害に率先して活動できる人材を育成している。大分や和歌山の水害被害などでもリーダーシップをとり活動した。

◇推薦者：特定非営利活動法人 Youth for 3.11  
関西支部 支部長 山川 貴大

2011年3月11日、東日本大震災発生当日に設立されたYouth for 3.11は、災害支援ボランティアにおける物理的・精神的・金銭的なハードルを取り除き、学生が現地に行きやすい環境を整えています。交通手段や宿泊場所、事前研修等、活動に関わる全ての行程をパッケージ化することにより、これまで延べ14,895名の学生の力を届けてきました。震災から3年が経過しようとする現在も、農業支援や漁業支援、コミュニティづくり活動等、ニーズのある地域に対して各地の復興のフェーズに合った支援を提供しています。

多くの学生を巻き込み、課題解決に取り組んできた2年半でしたが、がむしゃらに走り続ける中で、ある2つのことに気が付きました。それは、被災地東北の課題は、震災がきっかけで顕在化されただけのものであり、同様の課題は、多くの地方都市に潜在的に存在しているということ。そして、継続的な東北支援や、各地で頻発する水害支援を短期的に行う中で、緊急災害時に主体的に動く多くは、何らかの形で元々被災地と繋がりがあったことです。これらの事実を受けてYouth for 3.11は、緊急災害時に主体的にアクションを起こせる存在を増やすため、東北以外の地域における社会課題、特に、学生が関わりやすい第一次産業の課題に対する継続派遣を行うことを決めました。この活動を通して、学生がより社会問題の解決に参画できる社会の実現を目指します。

現在、組織を運営する約40名の常勤スタッフ（全員学生）のうち、半数以上が震災当時高校生だった者です。当時は、「何かしたくても何もできない」という思いを抱えていたものの、大学生になってからYouth for 3.11に所属し、自分たちが現地を訪れるだけでなく、同世代の学生を現地に送るために、大学生活をフルに使っ

て活動を続けています。そのモチベーションは、単純に「東北のために何かしたい」というものだけでなく、「将来起こるであろう災害時、自分と一緒に動く仲間をつくりたい」という思いがあります。

しかし、世の中の風化が進む中、スタッフの皆も同様に、自身のモチベーションを保つのに苦勞をし、「やりたいこと」「やるべきこと」を見失う瞬間が多々ありました。特に、震災から3年目を迎えようとしている今、組織において「モチベーションの維持」が最大の課題でした。

そんな中、今回社会貢献支援財団の皆様より身に余る賞をいただき、改めて自分たちの活動の意義を見つめなおすことが出来ました。設立から年月が経ち、代表者や常勤スタッフが変わりゆく中でも、常に新たな価値を提供し続けるよう、過去の仕組みにとらわれることなく、新しいことに果敢に挑戦できる＜新陳代謝の良い組織づくり＞を目指して、今後も励みます。

特定非営利活動法人 Youth for 3.11  
安井 美貴子

▼ミーティング：  
より良い継続支援の為毎週話し合い



▲事前研修：  
現地出発前、活動のスローガンを定めます



▲振り返り会：現地活動を終え帰着後リフレクションを行います



▲現地活動①



▲現地活動②

# 被災地における高齢者への肺炎球菌ワクチン緊急接種プログラムワーキングチーム



内藤 麗

東京都

震災後、被災地へは各製薬会社が提供し取りまとめられた医薬品45tが届けられていたが、管理の難しいワクチンは含まれておらず、混乱を招くとの懸念から追加の寄付も控えられていた。そんな中、生活環境の悪い避難生活下で高齢者の肺炎が増えることが懸念され、「肺炎球菌ワクチン」を求める被災地の医師たちの声が、同ワクチンを製造・販売するMSD株式会社の肺炎球菌ワクチンプロダクトマネージャー（当時）内藤麗さんに届き、被災地の高齢者への同ワクチン接種へ向けて動き出すこととなった。内藤さんはワクチン提供への諸問題を洗い出し、社内、医薬品卸会社、現地の医師や災害派遣の医師たちと協議を重ね、気仙沼市医師会が接種プログラムを作り上げ、同市および南三陸町で2ヶ月後の5月より計約5,500人の高齢者への接種が実現した。その後、日本赤十字社が海外救援金による復興事業として宮城、福島、岩手の3県全域でも行うこととなり、2012年3月までに48万人を超える高齢者が接種を受ける大規模な事業となった。

◇推薦者：株式会社ケアーズ 白十字訪問看護ステーション  
代表取締役 統括所長 秋山 正子

東日本大震災後、避難生活がどのようなものになるかは、専門家の方々の眼には明らかでした。当時、製薬会社のMSD株式会社に勤め、主に高齢者向けの肺炎球菌ワクチン（「肺炎球菌」という肺炎を起こす原因として最も多い菌の感染を予防するワクチン）のプロダクト・マネージャーという仕事をしてきた私のところには、震災後すぐに、東北各地の医師の方々から「せつかく助かった命を肺炎で落とすことになる。ワクチンが必要だ」と悲痛な声が届きました。衛生・栄養環境が悪く、日頃の病気の管理がままならない状態では、特に高齢の方は肺炎にかかりやすく、阪神・淡路大震災や海外の事例からも被災後に肺炎が増えることが間違いないことを、当時私もすぐに文献などで確認していました。

しかし、ワクチンの提供は生易しいものではありませんでした。輸送経路の確保、不安定な電力供給の中での8度以下の冷所保存管理、接種場所の確保、ワクチンの受け渡し、安全な接種環境の保持。そして、被接種者の方々の過去の接種歴や日頃の病気の確認など適切な問診が可能か、どこに何人いるのか、誰がそれを把握できるのか、接種後のフォローはできるのか、課題は山積していました。

そのような中、PCAT（日本プライマリ・ケア連合学会震災支援プロジェクト）の活動で気仙沼から東京に戻った内藤俊夫先生（順天堂大学医学部総合診療科）から連絡がありました。「気仙沼地域に肺炎球菌ワクチンを送れないか」。そこには、内藤俊夫先生、そして気仙沼市医師会の強い思いがありました。気仙沼ならできると私はそう強く感じ、一度は「無償提供は困難」と判断した会社の関係者への説明と説得、そして必要な手配に奔走しました。高齢者向けの肺炎球菌ワクチンは、日本でMSD社だけが提供するワクチンです。私は、自分がそのワクチンの担当責任者たる立場にいなからワクチンを届けることができなかつたら、一生後悔と共に生きることになる、私が持つてでも届けなければいけないという思いの一点でした。

困難とされた理由は上記のとおりで、もちろん、ワクチンを提供する製薬会社だけではどうにもならない話でした。気仙沼地域を担当しているMSD社の医薬情報担当者（MR）の安達勝久さんとの連携で、現状を把握し、気仙沼市医師会長の友大先生と相談を重ね、行政である気仙沼市からの賛同、そしてバックアップ（住民の状況把握、接種場所の確保、告知等）も得られることになり、医師会事務長の藤田正廣さんが中心となって通常のやり方とは全く異なる「災害緊急対応版」として接種のためのフローチャート（図参照）を一気に書き上げ、必要な項目をひとつひとつクリアすることができました。程なくして、気仙沼市医師会の管内である南三陸町でも接種の方針が決まりました。そして、肝心の「保管場所」として、唯一被災を免れていた医薬品卸会社の東邦薬品株式会社の医薬品冷蔵庫の無償供与を、当時の気仙沼営業所長の田口栄さんが社内でもかけあってくれました。さら

には、順天堂大学から接種に必要な注射器も無償で提供されました。それは、見事なチームの連携プレーであり、ワクチンで助けられる命を失ってはならないというそれぞれの強い思いがつながり結実したのだと思います。

ゴールデンウィーク明けから各避難所での接種が開始されました。接種にあたっては、医師の方々をはじめ、行政、看護師・保健師・薬剤師の方々など数えきれない多くの方々の協力と連携があり、奇跡のように全てがつながりました。MSD社内でも生産・物流管理など多くの部署が緊急対応を行いました。何しろ、5,500人分を一度に一ヶ所へ送ることも、一度に接種することも、平常時に違ってしたことがありませんでしたので、皆それぞれが無我夢中で「出来る方法」を考えていたと思います。その後、この取り組みが周囲の地域にも広がり、岩手・宮城・福島の3県で約48万人が肺炎球菌ワクチンを接種するという大規模なプログラムに広がったのです。震災後の不安定な環境の中で、どれだけ多くの方々の支援・協力によってこれらの取り組みが実現したか、計り知れません。

ただ、今回の経験から分かることとして、震災が起きてからワクチン接種しようとしたために多くのハードルができてしまっていたのも事実です。本来は、日頃からのワクチン接種が必要で、病気の予防も含めて備えを行っておけば、もしかしたらこんなに慌てる必要はなかったのだと思います。ですが、人間完璧にはなれないもの。何か起きてしまったら、その時に一番大切なことを見失わずに、救える命を救うこと、そしてひとつでもやれることをやる方法を見出すことだけを忘れずにいたと思います。

最後に・・・東日本大震災から2年半余が過ぎた2013年末、本原稿を草稿中に予防接種法改正案採択のニュースがありました。65歳以上の高齢者への肺炎球菌ワクチン接種が、これまでの任意接種の制度から「定期接種」に組み入れられることとなり、全国的に日頃からワクチン接種をしやすい環境が整ったことを、チーム一同心から喜んでます。

被災地における高齢者への肺炎球菌ワクチン緊急接種プログラムワーキングチーム  
内藤 麗



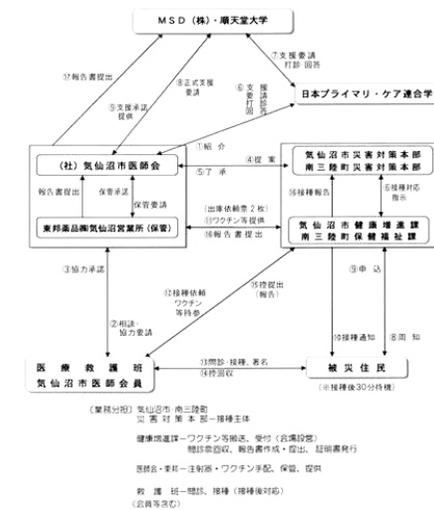
▲ MSD 株式会社



▲ 東邦薬品 田口所長と薬剤師の加藤大策さんと保管冷蔵庫の前で



▲ 順天堂大病院 内藤俊夫先生と



▲ フローチャート



▲ 公立南三陸診療所(前公立志津川病院)の看護師 & 薬剤師のみなさん



▲ 大友仁先生、藤田事務長、安達勝久氏、医師会事務の波辺涼子さん



▲ 保冷バッグ  
これで東邦薬品さんから避難所へワクチンが運ばれた



▲ 地震直後の気仙沼市内の写真 (大友病院 吉川順一先生ご提供)

◀ 2013年6月の気仙沼市内の様子

## 高松市消防職員協議会 中井 聡

香川県



震災後の4月に香川県高松市消防職員として石巻市で支援活動を行ったが、消防士としてこれまでに見たことも無い惨状に茫然とし、帰宅後も被災地への思いが残り、南三陸に場所を移して中井さんを中心に協議会のメンバーで活動を継続することにした。南三陸では崩壊寸前の家屋から家具を運び出したり、ビルの屋上に上り流された瓦礫を下すなど消防職員にしかできない危険な作業を行って本領を発揮した。香川と南三陸を自家用車で往復し、103日、延べ274人の職員が作業にあたった。また、高松市でボランティアの横の連携を図るため、「あの日を忘れないプロジェクト in 香川」を立ち上げ2012年10月、2日間で10,000人以上の来場を迎えた「被災地を思い、被災地に学ぶ」と題したフォーラムを地元企業の協力のもと開催した。

◇推薦者：一般社団法人 よみがえれ南三陸 代表理事 中島 響

東日本大震災で被災された方々に、心から御見舞い申し上げます。また、今尚、継続的に復旧、復興活動にご尽力されている方々に敬意を表します。

今回、社会貢献者表彰の推薦を頂いたとき、正直、『なぜ私なんかが？もっと素晴らしい活動をされている方が大勢いるのに！』という思いでした。そのことを推薦していただいた方にお伝えすると、「一緒に活動した仲間の代表だと思って受けてください」という言葉を頂きました。そして表彰式で日下会長から、「この賞は、上からの表彰じゃない。皆様の活動に感謝し何かの形に残し後々に伝えるためのイベントです」と挨拶を聞き、私でも受賞させていただいてもいいのかなと思えるようになりました。

2011・3・11 消防職場で震災の報道が流れました。映像を見て、遠く離れた消防は何を出来るのだろうかということを考えていました。数日後、消防緊急援助隊で派遣された職員から被災地の様子を聞き、とにかく被災地へ行きたいという思いが強くなり、4月2日から休みを取り、被災地に入りました。想像を超えた状況に恐怖を覚えながらも、被災家屋でのボランティア活動を行いました。香川に帰り、「本当に役立ったのか？」「何をすればいいのか？」「また、被災地に行きたい」と毎日考えていました。そして、「今こそ、消防職員でしか出来ない活動をしよう！」と職場の仲間にか声をかけ、2011年11月までに延べ274人の消防職員と、倒壊寸前の家屋やビル屋上での危険な場所での活動を行いました。

そして、被災地へ通い半年が過ぎた頃に、被災された高校生に「これからどのような支援をしたらいいのか？」と尋ねたところ、「私たちは、今まで皆さんに十分な支援を頂きました。これからは、この震災を忘れずに、地元で役立ててください」

と聞かされ、2012年7月に【あの日を忘れない・・・プロジェクト実行委員会】を立ち上げ、2012年10月20、21日に【被災地を思い、被災地に学ぶフォーラム in 香川】を開催し、2日間で1万人以上の来場者を迎えることが出来ました。

この度の社会貢献者表彰を頂くことが出来たのは、一緒に活動してくれた消防の仲間、被災地で出会ったボランティアの方々のおかげです。有難うございました、そして今後ともよろしくお祈りします。

最後に、被災地の一日も早い復興を願い、この災害を忘れず伝えていくことをお約束します。

高松市消防職員協議会 中井 聡



▲『被災地を思い、被災地に学ぶフォーラム in 香川』



▲瓦礫の向こうに花火



▲水が無く、どぶ川の水で顔を拭く



▲初めて目にした被災地



▲心の復興には・・・

## 社会貢献者表彰分野・年度別受賞者数実績表

表彰分野	1期 昭46	2期 47	3期 48	4期 49	5期 50	6期 51	7期 52	8期 53	9期 54	10期 55	小計
人命救助等	93	203	156	157	213	197	235	255	230	183	1922
国際社会への貢献											0
青少年育成・スポーツの振興	14	21	33	101	111	95	97	81	75	76	704
社会福祉への貢献	62	58	82	149	140	200	149	114	102	119	1175
文化の振興				3	7	11	5	9	11	11	57
地域社会への貢献	14	18	12	14	26	19	20	15	12	14	164
運輸交通への貢献	23	15	16	24		43	66	57	55	52	351
その他	34	35	87	97	114	95	105	135	139	105	946
小計	240	350	386	545	611	660	677	666	624	560	5319
式典月日	3/23	11/10	10/26	9/26	12/10	11/5	11/8	11/7	11/7	11/21	
式典会場	①ホテルニューオータニ					②笹川記念会館					

表彰分野	11期 昭56	12期 57	13期 58	14期 59	15期 60	16期 61	17期 62	18期 63	19期 平元	20期 2	小計
人命救助等	195	208	177	198	274	193	106	127	89	98	1665
国際社会への貢献										19	19
青少年育成・スポーツの振興	81	93	89	78	92	117	22	24	26	26	648
社会福祉への貢献	95	112	124	109	104	103	38	38	46	57	826
文化の振興	16	13	17	20	19	12	9	7	13	8	134
地域社会への貢献	15	12	12	15	8	13		3	7	11	96
運輸交通への貢献	42	40	38	45	35	31	55	54	69	76	485
その他	96	95	104	94	86	56	57	48	39	10	685
小計	540	573	561	559	618	525	287	301	289	305	4558
式典月日	11/5	11/30	11/16	11/6	11/20	11/21	11/10	11/8	11/8	10/9	
式典会場	② 笹川記念会館										

表彰分野	21期 平3	22期 4	23期 5	24期 6	25期 7	26期 8	27期 9	28期 10		小計	受賞者 合計
人命救助等	101	82	34	15	47	21	27	16		343	3930
国際社会への貢献	13	17	14	4	8	5	5	6		72	91
青少年育成・スポーツの振興	40	54	44	29	22	25	28	32		274	1626
社会福祉への貢献	64	75	68	28	36	37	34	42		384	2385
文化の振興	11	15	10	3	8	10	10	12		79	270
地域社会への貢献	12	9	4	7	14	20	19	19		104	364
運輸交通への貢献	83	80	49	18	14	18	16	20		298	1134
その他	13	7	7	0	0	0	0	0		27	1658
小計	337	339	230	104	149	136	139	147		1581	11458
式典月日	11/7	11/5	11/1	11/7	11/1	11/12	11/13	11/9			
式典会場	②		③ホテル海洋			④東京全日空ホテル					

## 社会貢献者表彰部門・年度別受賞者数実績表

部門	29期 平11	30期 12	31期 13	32期 14	33期 15	34期 16	35期 17	36期 18	小計	受賞者 合計
第一部門 緊急時の功績	6	5	6	8	5	4	5	2	41	
第二部門 多年にわたる功労	14	15	11	12	13	11	11	18	105	
第三部門 特定分野の功績 (海の貢献賞)		4	7	8	8	11	9	9	56	
(国際協力賞)		2	2	1	3	3	4	2	15	
(ハッピーファミリー賞)		0	0	2	1	3	1	2	9	
(21世紀若者)		2	3	4	4	3	4	5	25	
こども読書推進賞					3	3	3	3	12	
小計	20	24	24	28	29	29	28	32	214	11672
式典月日	11/10	11/22	10/29	11/19	11/4	11/15	11/16	11/20		
式典会場	④	①	④東京全日空ホテル							

※平成11年度より一般からの個人推薦を受け付ける  
平成11年度より表彰分野別功績内容を、部門別功績内容とする  
平成12年度より第三部門を新設、テーマを持った特定の功績に対応する  
平成15年度よりこども読書推進賞を新設する

## 社会貢献者表彰部門・年度別受賞者数実績表

部門	37期 平19	38期 20	39期 21	40期 22	41期 23	42期 24	43期 25		小計	受賞者 合計
人命救助の功績	9	13	11	11	8		3		55	
社会貢献の功績	33	35	34	34	39		36		211	
特定分野の功績 (海の貢献賞)	1	2	3	5	2		2		15	
こども読書推進賞 ※表彰式：6/26 会場：虎ノ門パストラル	1								1	
東日本大震災における 貢献者表彰 ※表彰式：5/1 帝国ホテル						128	12		140	
小計	44	50	48	50	49	128	53		422	12094
式典月日	11/13	11/17	11/24	11/16	11/21	5/1	11/25			
式典会場	④ ANA インターコンチ ネンタルホテル東京				⑤帝国ホテル					
	12094									

※平成19年度より部門名を変更する こども読書推進賞は最終回  
※平成24年度は東日本大震災における救難活動された方を表彰

## 都道府県別受賞者内訳

県名	平成24年度までの累計	平成25年度の受賞者	受賞者数
北海道	639	2	641
青森県	177	2	179
岩手県	210	1	211
宮城県	366	6	372
秋田県	123		123
山形県	152		152
福島県	175		175
茨城県	193	1	194
栃木県	145		145
群馬県	241	1	242
埼玉県	460	1	461
千葉県	391	2	393
東京都	1124	6	1,130
神奈川県	609	2	611
新潟県	253	1	254
富山県	143		143
石川県	143		143
福井県	204		204
山梨県	132		132
長野県	197		197
岐阜県	211		211
静岡県	308	1	309
愛知県	299	1	300
三重県	162	1	163
滋賀県	97	1	98
京都府	196	1	197
大阪府	471	3	474
兵庫県	500	1	501
奈良県	111		111
和歌山県	142		142
鳥取県	90		90
島根県	111		111
岡山県	305		305
広島県	405		405
山口県	271		271
徳島県	173	1	174
香川県	192	2	194
愛媛県	150		150
高知県	71		71
福岡県	533	1	534
佐賀県	117	3	120
長崎県	265	3	268
熊本県	224		224
大分県	123	2	125
宮崎県	70	1	71
鹿児島県	138	1	139
沖縄県	154	1	155
その他	75	4	79
合計	12,041	53	12,094

※受賞者数は、当財団設立の昭和46年からの都道府県別受賞者件数の累計

※県名は、受賞者居住地の都道府県名。その他は居住地が海外

※受賞者数は、こども読書推進賞受賞者、東日本大震災における貢献者表彰受賞者も含めて累計

## 役員・評議員一覧

平成25年11月1日現在

会長	日下 公人	日本財団 特別顧問
副会長	内館 牧子	脚本家
専務理事	天城 一	公益財団法人 社会貢献支援財団
理事	久米 信行	久米繊維工業株式会社 取締役会長
理事	永嶋 久子	株式会社 資生堂 元取締役
理事	三谷 充	三谷産業株式会社 代表取締役会長
理事	屋山 太郎	政治評論家
監事	篠原 由宏	篠原法律会計事務所、弁護士
監事	竹内 清治	BOAT RACE 振興会 元理事
評議員	石井 宏治	株式会社石井鐵工所 取締役社長
評議員	尾島 俊雄	銀座尾島研究室 主宰
評議員	今 義男	一般財団法人 シップ・アンド・オーシャン財団 (海洋政策研究財団) 理事長
評議員	さかもと 未明	漫画家、作家
評議員	重村 智計	早稲田大学 国際教養学部 教授
評議員	泊 懋	一般社団法人日本動画協会 顧問
評議員	中島 健一郎	株式会社 ACORN 代表取締役
評議員	広渡 英治	公益財団法人 日本吟剣詩舞振興会 常任理事
評議員	藤原 正彦	お茶の水女子大学 名誉教授

## 公益財団法人 社会貢献支援財団

---

設 立：1971年5月1日  
所 在 地：東京都港区西新橋 1-11-3 虎ノ門アサヒビル 10階  
郵便番号：〒105-0003  
T E L：03-3502-0910  
F A X：03-3502-7190  
U R L：<http://www.fesco.or.jp>

---

## 社会貢献者の記録

---

2014年3月15日発行

発行者：公益財団法人 社会貢献支援財団  
Published by Foundation for Encouragement of Social Contribution (FESCO)  
<http://www.fesco.or.jp>

印刷：株式会社 創美

---

